



2019年 9月6日  
旭川地区ミニバスケットボール連盟 技術委員長  
中川 明  
(文責：伊部 大樹)

## 2019年度 夏期大会 総評

夏期大会は、選手権大会の直近ということもあり、気迫溢れる強いプレーが多く見られたのが印象的でした。

今大会においては、組み合わせ抽選会の時に、「旭川地区としての“マンツーマン”の見直し」が話題に上げられていました。そのため、コミッショナーをおいた決勝トーナメントでは、マンツーマン違反である赤旗が挙げられる場面が今までの大会よりも多くありました。しかし、この赤旗は罰則ということではなく、試合中に正しいマンツーマンについての指導機会を与え、旭川地区として選手を育てていこうという意図のものです。今後マンツーマンについての講習会も予定されていますので、各チームにおいても正しい“マンツーマン”について理解を深め、練習して行ってほしいと思います。

今大会、“マンツーマン”がより一層強調されたことで、良い点が見られました。それは、ディフェンスのプレッシャーが強くなったことです。ボールマンディフェンスで、簡単に前を向かせないプレー、ボールを奪うプレー、また、オフボールマンのディフェンスがパスカットをするプレーが多く見られました。自分のマークマンを守ろうという意識の高まりを強く感じました。

しかし、同時に課題も見られました。それは、前回大会の総評でもあったように、オフェンス側の「良い状況判断力」を身につけるということです。試合中にパスカットが起こるということは、プレイヤーの適切な状況判断の中でパスが出されていないということです。多くの選択肢の中から最適なプレーを選択できているのか、チームの決まった形としてプレーしているのかでは、プレーの質が大きく異なります。「そこに出さなければいけない」ではなく、「そこが空いているから」「そこがチャンスだから」という意識でプレーできるように指導していくことが大切です。

ディフェンスでは、「自分のマークマンを守る」というマンツーマンが基本ですが、それはヘルプに出てはいけないということではありません。正しいポジショニング、スタンス、ビジョンから、適切なタイミングを判断して出ていく必要があります。また、自分のマークマンについていたとしても、状況によってはマークマンが入れ替わること（ローテーション）もあります。それらを瞬時に判断し、動けるチームが勝ち残っていったように感じます。

最後に、選手権大会まで残り約2ヶ月となりました。6年生にとって最後の大会に向け、プレー面はもちろんですが、心と体の準備をしっかりとし、一人一人が100%のパフォーマンスを発揮する姿に期待しています。